

十二月四日のたったの五分

御津南部小・6 中田 悠菜

十二月四日、私は、今までに経験したことのない荒い息と達成感でかたを上下させながら心から笑った。

十一月から、かけ足運動が始まった。私はがっかりしていた。運動や体育が苦手な私は放課がなくなったことと、十二月四日が近づいてきているということのため息をついた。どうしてこんなにつかれるものをやらないといけないのだろうか。別にやらなくてもいいのではないかと。つかれるくらいだったら教室でゆっくり過ごしていたいと思うってしまう程だった。感染予防のために、かけ足運動を休んだ時は心で少し喜んでしまったときもあった。

月日はあつという間に過ぎていってしまい、気づくと明日は十二月四日になっていた。昨年のようにまた順位が下がるのかなと不安になった。五年生のときの私は、おと年の順位を下回ってしまっていたのだ。そのことを思い浮かべると余計に走りたくなくなっていた。でも、今日は小学校生活最後のかけ足運動。最後であるならきちんとやりとげたいという気持ちもあった。カラーコーンの位置に並びいつもの合図でグラウンドをかけた。今日こそはみんなに追いつこうと必死で走ったがみんなは遠ざかっていくばかりだった。しかし、どうしても追いつきたいという思いが強くなり、私は今出せる力をふりしぼった。最後のかけ足運動の結果は四周。いつもなら三周半なのに、今日はそれを上回った。半周増やせただけでもうれ

しくなった。これと同じように十二月四日も順位を上げられるかもしれないと思った。いや、やっぱり運動や体育が苦手な私にはどうせ無理な話だろうと心のすみでは思っていた。

ついに来てしまった、十二月四日。今日、一キロメートルを走ると思うとゆううだった。一、二時間目が終わり、準備運動をするために五年生と一緒に中庭に出た。準備体操をするというのは、本番も目前。外はやっぱり寒い。こんな寒い日に半そでで走るのかとふるえながら体操をした。五年生が終わり、六年生男子が始まった。もう走ることから逃げられないと応援しながら思った。六年生男子の最後の子がゴールした。私は深呼吸をした。長そでをぬぎ、半そでになり整列した。ウォーミングアップをして、

「いちについて…。」

ピストルの音と同時にみんなが走り出した。私は最初から本気で走った。最初から本気で走って、なるべく同じペースで走ることができればきつと速く走れると思ったからだ。しかし、大トラックに入ろうとしたところからペースが落ちた気がした。つかれてきたんだ。前の人の後ろを必死でついて走った。応援の声私の背中を押す。呼吸が荒くなってきた。呼吸のリズムを一定にしてから中トラックを一周走った。中間地点にある帽子を入れるかごを見ると、すでに六、七個の赤白帽子が入っていた。みんな速いなあと思いながら小さきみに息を吸って走り続けた。私も、トラック二週の終わりに赤白帽を取り、かごに投げ入れた。そして小トラックに入った。ゴールはもうすぐ。前の人とのきよりは三メートルほどになっていた。悔しくも前の人を抜くことができなかつたが、私もあきらめず

に最後の力をふりしぼってゴールした。息がもって荒くなった。私には高鳴る自分の心音と荒い息の音しか聞こえなかった。結果はおどろいたことに十四位。タイムは五分弱で昨年の五分半とは差があまりにも大きく感じた。今まで頑張ってきた甲斐があったんだ。私もこんなに速く走ることができたんだって思えた。そう思ったしゅん間、今までに経験したことのない荒い息と達成感でかたを上下させながら、心から笑えた自分がいた。

たったの五分。それだけで心が変わった。何事にも意味がある。だから本気で挑むんだと。そう心で思えた。苦手なことでも、精一杯努力して本気で挑んでいきたいと私は思った。